

次の文章を読んで、以下の各問に答えなさい。

ターバンを巻いて髭を生やした男性、白い肌のプロンドヘアの女の子、真っ赤なチャイナドレスに身を包んだ女性、ドレッドヘアの黒人女性……国籍も民族もさまざまな人たちが、青々と光り輝く丸い地球の上で、手をつないで立っている。こうした絵に「私たちの地球環境を守ろう」という文字が添えられたポスターを、どこかで目にしたことはないだろうか。それは、環境省の ^A啓蒙ポスターであろうと、小学生の絵画コンクールであろうとよく使われるイメージである。それが伝えようとしているメッセージは明確だ。自然環境というのは境界のない「ひとつの」ものである。だからこそ「私たち」は国や民族や文化の違いを超えて協力し、それを守らなくてはならない。

このような絵につづいて、環境省のホームページには次のようなことが書かれている。「地球の環境を守っていくためには、地球に住むみんなが環境を大切に思う気持ちをもつことが大事。小さなことでも力を合わせて取り組んでいけば、自然豊かな未来につなげることができるよ!」。じっさい、私たちの身の回りには、^B「小さな取り組み」への呼びかけがあふれている。燃えるゴミと燃えないゴミを分けること、電気をこまめに消すこと、マイ箸・エコバックを持参すること、コピー用紙の裏紙を使うこと……。それらは、「地球市民」だれもが日常生活のなかで取り組むべき「地球にやさしい」行動のパターンだ。

このように、自然環境について私たちが考えるとき、そこにはいつも（文化や民族と違って）「ひとつの」「普遍的な」「全人類が協力して保護すべき」自然といったイメージがつかまよう。自然ではなく人間についての学問であり、また人間の普遍的な特徴だけではなく、違いや多様性に目を向けてきた文化人類学においても、自然は重要なトピックになってきた。自然についての人類学の研究は、さまざまな方法で、自然をめぐる「あたりまえ」のイメージを問いなおしてきた。「二酸化炭素の排出が温暖化をまねく」といった科学的知識は、自然についてのたったひとつの正しい知識なのだろうか。そもそも、自然はほんとうに「ひとつのものの」なのか。こうした問いについて考えていくことで、私たちはこれからいかに他の人間や自然界における多様な存在と共生していけるのか、より広い視野から考えることができるだろう。

「地球市民」として環境のために何かしようとしたとき、私たちが頼るのは、「二酸化炭素の増加が温暖化をまねく」「この動物は絶滅危惧種である」といった近代科学の知識だ。それは、自然についての客観的な正しい知識であり、全世界で同じように共有され、地球環境保護のベースとなるべきだと信じられている。それに対して人類学は、「未開社会」においても近代科学に ^D勝るとも劣らない、自然についての経験的な「知識」が存在すると伝えてきた。マリノフスキーは、このような知識を「未開の科学」と名付けた。

そうした「未開の科学」を具体的に描いたひとりとして、認識人類学という分野を切り拓いたハロルド・コンクリンがいる。コンクリンは、フィリピン・ミンドロ島に暮らすハヌノオの人たちが身の回りの事物や生きもの、とくに植物をどのように分類し、名づけるのかということに注目した。コンクリンの前にも「民族植物学」と呼ばれる分野の研究者たちが、さまざまな民族が用いる植物の名称を調べ上げていた。ただしそれは基本的に自然科学の側からのアプローチであり、現地の人びとの用いる植物を植物学の学名に即して整理していた。それに対しコンクリンは、ハヌノオの人たち自身が用いる植物の名称を詳細に調べ上げ、当時のアメリカの人類学でさかんだった言語学的な分析を加えた。ここに自然と人間の関係を、個別社会における動植物と人間の関係、とりわけ動植物についての「民俗分類」をもとに考えていこうという流れが生まれた。

コンクリンによると、ハヌノオの人たちは1625種類の植物を名づけ、分類する『「優れた植物学者」である。この1625という数字がいかにすごいかは、私たちがチュエーリップ、すみれ、たんぽぽ、など何種類の植物の名前を日本語で挙げられるかを考えてみるとわかるだろう。そしてハヌノオの植物の名前は、詩歌において多様な意味をもたせられるなど、人びとの生活の文化的側面と密接に関連している。さらにハヌノオの人びとは植物をデタラメに名づけているのではなく、発芽の仕方、茎の伸び方などの生長上の特徴に即してくわしく分類しているという。つまりそれは、生殖上の特徴に即して植物を分類する科学である植物分類学のやり方とは異なるものの、すぐれて内的に一貫した体系である。だからこそ私たちはそれを「知識」と呼ぶことができる。

コンクリンは、植物分類についての研究のほかに、ハヌノオの人びとが自然界にある色をどう認識し、分類するかについての研究を発表している。コンクリン以降、多くの人類学者がさまざまな社会の人びとの豊かな分類知識をもとに、私たちの社会で信頼されている科学だけが唯一の自然知識ではないことを示してきた。こうした研究は1980年代以降、人類学を超えて、じっさいの開発プロジェクトや自然資源管理プログラムなどにおいて評価されるようになっていく。

「参加型開発」ということばを生み出したロバート・チェンバースによると、土着の知識は科学よりもそれぞれ地域の地域の生態系に適合的である。それゆえに、そうした現地の知識に頼ることなしには開発プロジェクトの成功はありえない。また近年各地の先住民の人びとが使う薬草がバイオテクノロジーを用いた最先端の製薬開発にヒントを与えている。生物多様性保全をめぐる施策に、近代科学がまだ名づけていない動植物を分類してきた現地の人びとの知恵が必要とされることが多い。1992年に採択された生物多様性条約では、生物資源についての地域コミュニティの人びとの「知識」を保護し、またそれに対する人びとの権利を保障するための規定が盛り込まれた。このようにして、遠くの人びとの自然をめぐる豊かな「知識」に目をつけるべき人類学の視点は、「自然についての知識＝自然科学の知識」という環境保護の前提をゆるがしているのかもしれない。

このように認識人類学の研究は、自然についての文化的に多様な分類知識を描くことで、自然科学だけが自然についての唯一絶対の知識ではないことを示してきた。その一方で、そういう研究の自然に対する人間の側の分類、自然についての文化的知識という前提を疑う潮流もある。コンクリンの民族誌を材料の一つとして「野生の思考」を書いたクロード・レヴィ＝ストロースは、「自然／文化」を二分する発想自体は普遍的だとした。そして、植物や動物はそれに対する分類をとおして人間の思考について「考えるのに適した」素材だと述べた。しかし、ほんとうに ^Fそうなのか？ 1980年代以降さかんになったのは、自然をどう分けるかの文化的多様性だけでなく、自然と文化をどう分けるかの多様性を見つめる研究である。

試しにまず日本のことばを考えてみよう。私たちは「自然」と言うとき、「手つかずの自然」「自然の脅威」などと表現する。ここにはたしかに、人間の文化の影響を受けていない自然環境、ありのままの動物や植物、山や川などの姿がイメージされているようだ。しかし翻訳研究者の柳文章によると、日本語の「自然」ということばは、明治以降に英語の nature の翻訳語として使われるようになって初めてこのような意味を獲得したという。明治以前には、自然という語は「おのずからそうなっているさま、天然のまままで人為の加わらぬさま」という意味で用いられていた。この古典的な自然の意味は、「人為」と対置されているという意味で nature と共通している。この共通点ゆえにこの語が翻訳語として選ばれた。しかし、日本語の「自然」はもともと副詞や形容詞として使われ、人為の加わらない「状態」を示していた。つまり、名詞として自然環境そのものを表すようなことばではなかった。今でも私たちが使う「自然」ということばには、古い意味

だ。それらの議論を前提にしたうえで、認識人類学のように具体的な自然と人間の関係、とりわけ身の回りの動植物と人間がどうかかわりありかを見ていこうとする人類学者の仕事もある。

たとえばシベリアのユカギールの狩猟採集民の世界では、人、動物、モノは魂を備え、同じ理性的能力をもつ。ヴィヴェイロスはデ＝カストロの描いた南米の神話世界と同じように、それぞれが異なっているのは、種ごとに固有の身体をもっているためだ。狩猟の場において狩人は、獲物であるトナカイの真似をして移動し、匂いを嗅ぎ、音を出すことで、同族となって彼らを惹きつけようとする。ただしそこで完全にトナカイに変身してしまうと、人間に反れなくなってしまう（そのような危険な事例もたくさんある）。人間としてのアイデンティティを維持したまま、一時的かつ不完全なたちで動物の身体を身にまとい、その視点を獲得することが重要なのである。

注目すべきは、こうした自然と文化、人間と他種の間を問いなおさまま最近の研究は、遠く離れた「他者の現実」について語っているのみならず、私たちの社会についても異なるものの見方を示していることだ。考えてみれば、自然を人間の生活から分離した「手つかずの」実体ではなく、人間と他種との具体的なやりとり・交渉の場ととらえるならば、たとえば都市生活のなかでも自然はある。

私たちの多くは、決して自然豊かな環境のなかに住んでいない。また、コンクリンの描いたハスノオの私たちのように植物種の名前をたくさん知っていて、自然についての体系化された知識をもっているわけではない。しかしそんな私たちでも、具体的な生きものや事物と絶えずやりとりしていることには変わりがない。^N私たちはペットと情動的な関係を築く。そこで、ユカギールの人たちと変わらず、犬になりきった声真似をして飼った犬を呼んだり、飼い主として自分と犬を差異化したりする。その一方で私たちの生活は「愛せぬ他者」との関係のなかにもある。たとえば私たちは、ゴミ捨て場に集まるカラスにゴミを荒らさないようにゴミ袋をきっちり縛ったり、新聞紙でゴミ袋の中身を見えなくしたりする。一時期の東京では、増えつづけるカラス対策として、カラス肉からミートバイをつくって売り出すという案まであったという。

さらに人間どうしのグローバルなつながりも、じつさいには多様な種間の入り組んだ歴史的な関係のなかにある。たとえばアナ・ツインは、松茸という種に注目してグローバルゼーションを描きおしている。日本人にとつての秋の味覚・高級食材として有名な松茸が、じつさいにはその大部分を海外からの輸入に頼っていることはよく知られている。日本人は松茸を自国で栽培しようと試行錯誤をくり返し、ことごとく失敗してきたのだ。

そもそも松茸はどう育つのか？ 松茸は木から栄養を摂取するものであり、松茸菌は木の根と結合することによって、菌根という構造を作り出す。その共生関係は決して穏やかなものではないという。松茸は菌として成長することで、根の一部を腐らせてしまう。その一方で松茸は、強い酸を分泌して、岩や土から無機物を溶かすことで、木に栄養を届ける。また撥水性の厚い菌蓋を作り、他の菌類やバクテリアの侵入を防ぐ役目も果たしている。

注目すべきは、こうした松茸と松の木の「共生」関係は、ある程度貧しい土壌でこそ成り立つということだ。良い土壌で競合する種が多い場合、松茸は死に絶えてしまうからだ。つまり松茸は、人間による持続的な森林への介入の結果、生育する。それでも松茸があるということは、その森が完全には壊滅していないことを意味している。この^Q微妙なバランスは、今のところ人間による意図的なデザインによって「偶然」松茸の生産がもたらされた。そこでは、松茸の採集が一大ビジネスとなり、日本の消費者とのあらたなつながりを生んでいるという。ここに人間どうしのグローバルなつながりが松茸とその他の種の間接に媒介されている

と新しい意味が混ざりあっている。私たちは、リラクセスした、飾らない状態でテレビに出る芸能人を「あの人は自然体がいい」と賞賛する。その一方で、「手つかずの大自然」「自然の脅威」などという意味での新しい「自然」も、すっかり私たちになじんでいる。

つまり、日本のことを考えても、人間の文化の影響を受けていないありのままの自然環境、という意味での「自然」は、西欧からの輸入によって成立している。それはせいぜいここ150年くらいの発明であって、G「あたりまえ」ではない。1980年代から90年代にかけての人類学は、各地の「自然と文化」というカテゴリーに大まかに対応する概念を詳細に検討した。そして、「（人間の外側にある）自然と（人間のつくりだした）文化」という分け方自体が、西洋の文化が構築したものであって、普遍的なものではないということを示していた。

こうしたなか、自然と文化との関係を普遍的なものととらえない視点に立ちながら、概念の検討ではなく、認識人類学と同じように動植物と人間の関係に注目した人類学者として、エドゥアルド・ヴィヴェイロスはデ＝カストロがいる。彼は、南米の先住民の神話を分析して、そこで広くみられるコスモロジーを描こうとした。西欧では自然がまずあり、そこから文化へ移行する（動物が人間へと進化する）と考えるのに対し、先住民の神話世界はその逆である（人間的な状態がまずあり、そこから動物が差異化される）。だからそこそこでは、あらゆる動物は人間同様の魂をもつと考えられている。そして動物たちはみずから人間だと考え、人間としての生活を営む。そしてみずからの生息地を村、果實の家、飲み物をビールとみなす。ただし、それぞれ身体が異なるため、ビールとみなすのかはそれぞれ異なっている。たとえば、ジャガーは人間の血をビールと見る、ハゲタカはウジ虫を焼き魚と見る、バクは泥だまりを^H「グレイの場」と見る。南米の先住民の世界は、こうした単一の精神（魂）のもと、異なる身体をもつ複数の存在によって成り立っている。

すなわち^Jこの世界は、生物学的な身体をすべての種に共通のものとすると一方で、精神的な世界、つまり文化に多様性を認める西洋世界とは対照的である。ヴィヴェイロスはデ＝カストロはこの南米先住民のコスモロジー（世界観）を、私たちになじんだ多文化主義という考え方（単一の自然と多文化的文化）に照らしあわせて、「多自然主義（単一の文化と多元的な自然）」と名づけた。

このヴィヴェイロスはデ＝カストロの仕事は、コンクリンの民族誌のような特定社会についての詳細な記録ではないし、現地の理解という観点からはいろいろと問題の多い著作である。一方で、「自然をめぐってどこに差異と多様性があるのか」について、認識人類学とは違うあらたな視点をうまく提示していることは確かだ。

自然に対する分類の多様性というとき、^K自然を分類する（唯一精神をもった）人間という想定がある。そこには、自然を人間の生活から分離した「手つかずの」実体と見る見方が潜んでいるのかもしれない。はたして誰にとつても、人間以外の種はただ人間に認識され、分類されるのを待っている「考えるのに適した」存在なのだろうか。むしろ人間と動物のあいだに魂の連続性を見る人たちの立場からは、動物は身体のみをとりをつうじて人間と「ともに生きる」存在であり行為主体なのではないか。こうした視点から、他の種を認識し、分類する人間の知識ではなく、種間のかかわりあい^Lに「ショウテン」を含ませる民族誌が、あらためて今、注目を集めている。

近年の人類学は、自然をめぐる文化的知識の多様性を示すだけでなく、私たちのもつ自然のイメージ自体が特定の社会に固有のものなのではないかと疑うようになってきた。それは、^Mひとつの自然にたいする複数の文化という前提自体をひっくり返す視点の転換だった。前節で紹介したような議論はきわめて抽象的

のだ。

このように人間が自然をどう認識し、分類するかではなく、種間のかかわりあいという観点から人間と自然の関係を見つめなおす最近の研究は、他者だけでなく、私たちの社会についても語っている。私たちの生活は犬、カラス、キノコ、など複数種との関係によってこそ成立する。その複雑な絡み合いを解きほぐすことは、一つの自然を守る「地球市民」ではなく、多様な動植物や事物とのやりとりのなかでしか生きられない具体的な存在として、みずからをとらえなおすことでもあるのだ。

自然に対してはつねに、「ひとつの」「普遍的な」「全人類が協力して保護すべき」といったイメージがつきまとう。それに対して人類学は、多様な人びとにとっての「自然」をもとに、私たちの自然に対する「あたりまえ」のスタンスを問いてきた。はたして私たちが信頼している科学的知識だけが、自然保護のための有益な知識なのか？ そもそも自然に対する人間の知識や行動、といった場合の「自然と文化」の分け方は正しいのか？ 人類学的に「自然」を問いなおすことは、「私たちの自然を守ろう」といった抽象的な環境主義のスローガンを超えて、他の多様な生物、モノと私たちの日々の **R** な関係に目を向けることである。そうした視点は、「自然保護」「多種共生」という美しいことばではとても表現できない、私たちと多様な存在の **S** 緊迫した関係をもクローズアップする。

そもそも現代社会において、花粉症、鳥インフルエンザなど他の生きものの由来のウィルスは、すでに私たちの日常生活を脅かしている。私たちは冬にはインフルエンザワクチンを接種し、うがい・手洗いを徹底するように言われ、春になるとムズムズする鼻を押さえてマスクを着け、目薬をさす。そのようにして他種から必死で身を守りつづけることでしか、私たちの生活は成り立たない。だからこそ **T**「自然との共存」は今や遠く離れた美しい「自然」を「地球市民」という特権的な地位から守ることではなく、私たち自身の生存にかかわる他種との緊迫した関係である。つねに具体的な自然と人間の、種間の関係に注目してきた人類学の研究は、こうしたより日常的で差し迫った「環境問題」に目を向け、問いを生みだすためのあらたな視角を与えてくれるはずだ。

(中空萌「自然と知識」、松村圭一郎・中川理・石井美保編「文化人類学の思考法」所収、世界思想社より。原文の一部を改変している)

問1 下線部A「啓蒙」の同義語として適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 尊敬
- b 教育
- c 啓発
- d 周知
- e 伝達

問2 下線部B「小さな取り組み」を表す言葉として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 具体的なこと
- b 自分でできること
- c 地球上には国籍も民族もさまざまな人がいると思うこと
- d 日常的に取り組むこと
- e 力を合わせれば豊かな未来につながると思うこと

問3 下線部C「自然をめぐる『あたりまえ』」を表す言葉として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 科学的知識がたった一つの正しい知識である
- b 自然は一つのものである
- c 近代科学は客観的である
- d 近代科学は地球環境保護のベースになるべきである
- e 地球環境保護には経験的な知識が重要である

問4 下線部D「勝るとも劣らない」の対義語を表す言葉として適切でないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 見劣りする
- b 届かない
- c 身に余る
- d 歯が立たない
- e 伯仲する

問5 下線部Eで、筆者が「優れた植物学者」と表現する理由として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a ハスノオの人名とは植物の名前を1625種類挙げられるから
- b ハスノオの人名の中には植物に詳しい人が多数いるから
- c ハスノオの人名とは植物を生長上の特徴で分類し、それが内的に一貫した体系の知識と呼べるから
- d ハスノオの植物の名前が詩歌において多様な意味をもたされているから
- e ハスノオの人名との植物分類が、科学的な植物分類のやり方とは異なるから

問6 下線部F「そうなのか？」の意味として最も適当なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 自然科学だけが自然についての唯一絶対の知識ではないこと
- b 自然が人間の側から分類されることを疑うこと
- c 自然と文化を二分する発想が普遍的であること
- d 自然についての文化的知識と人間側の分類が対応していること
- e 自然を分類することは、人間についての考察に適していないこと

問7 空欄Gに入るものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a なぜならば
- b ところが
- c 飾らない
- d 西欧的な
- e まったくもって

問8 下線部H「ギレイ」の「ギ」を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a ギゲイに優れた人物
- b レイギにかなった行動
- c ジギに等しい行為
- d ペンギを図る
- e サギにあって金を失う

問9 下線部J「この世界」の意味として適切なでないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 動物たちはみずから人間と考え、人間としての生活を営む世界
- b 人間的な状態があり、そこから動物が差異化される先住民の神話世界
- c あらゆる動物は人間同様の魂をもつと考えられる世界
- d 自然がまずあり、そこから文化へ移行するという考え方の世界
- e 「多自然主義（単一の文化と多元的な自然）」と名づけられた世界

問10 下線部K「自然を分類する（唯一精神をもった）人間という想定」の意味として適切なでないものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 人間は唯一の精神をもっており、自然はその分類対象である
- b 自然は人間の生活から分離した「手つかずの」実体である
- c 人間以外の種は、人間に認識され分類されるのを待っている存在である
- d 動物は身体のみをとりを通じて人間と「ともに生きる」存在であり行為主体である
- e 動物は、人間に認識されるべき対象である

問11 下線部L「ショウテン」の「ショウ」を漢字で書いたときに、その漢字と同じ漢字を含むものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 役職がショウウシンする
- b ショウバヤの狙いが的確だ
- c いらいらしてショウソウしている
- d 現代のキョショウウといわれる人の作品
- e すばらしいと、ショウレイされる

問12 下線部M「ひとつの自然にたいする複数の文化という前提」を、文中の別の言葉で言い換えたものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 多自然主義
- b 多文化主義
- c 経験主義
- d 科学主義
- e 開発主義

問13 下線部 N「私たちはベットと情動的な関係を築く」の前提条件となっている「自然」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 自然を、都市の中の現実としてあるととらえること
- b 自然を、人間と他種との具体的なやりとり・交渉の場ととらえること
- c 自然を、体系化された知識の対象ととらえること
- d 自然を、人間が住むための快適な環境ととらえること
- e 自然を、人間の生活から分離した「手つかずの」実体と捉えること

問14 下線部 P「愛せない他者」の示すものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 飼い主
- b カラス
- c 犬
- d 人間
- e 日本人

問15 下線部 Q「微妙なバランス」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 良い土壌で森が育ち松茸が死に絶えてしまうバランス
- b 貧しい土壌で森も松茸も死に絶えてしまうバランス
- c 良い土壌で森も松茸も育つバランス
- d ある程度貧しい土壌で森も松茸も育つバランス
- e 良い土壌で森が壊滅し松茸が育つバランス

問16 空欄 R に入るものとして最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 具体的
- b 印象的
- c 抽象的
- d 普遍的
- e 科学的

問17 下線部 S「緊迫した関係」の意味として最も適切なものはどれか。下記の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- a 相手に危害を加えうる関係
- b 相手を拘束することが必要となる関係
- c 相手を観察することが必要となる関係
- d 責任をとることが必要となる関係
- e 相手を和ませる関係

問18 下線部 T「自然との共存」は、どのような関係を意味しているのか。二つの関係を対比的に説明し、句読点を含めて 50 字以内で説明しなさい。解答は、解答用紙の記述問題解答記入欄に書きなさい。